



第57回

卓球Tリーグ・プレーオフ決勝

※2024年3月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

卓球のTリーグ・プレーオフは3月23日に男子ファイナル(決勝)が行われ、実力者ぞろいの東京が岡山を降して王座に返り咲いた。

第1ゲームのダブルスで、ともにパリ・オリンピック代表の東京・戸上隼輔選手、篠塚大登選手組が敗れる波乱の幕開けとなった。前日のセミファイナル(準決勝)で琉球を破った岡山の勢いに押されかけた東京だが、シングルの松島輝空選手、戸上選手らが3連勝。初優勝を狙った相手を力でねじ伏せた。

レギュラーシーズンは初年度から全て1位で、優勝は過去3度。3季ぶりの優勝を目指した2023〜24年シーズンは、実力者がそろうがゆえに代表活動の影響でベ

ストオーダーを組めないことも多かった。だが、「大島(祐哉選手)や吉田(雅己選手)ら、普段はサポートに回る選手が活躍してくれたのが大きかった」と倉嶋洋介監督。チーム力の底上げも進み、レギュラーシーズンは15勝4敗。2位の琉球に勝ち点差5をつけて駆け抜けた強さを、プレーオフでも発揮した。

「常勝軍団」「スター軍団」と見られることについて倉嶋監督は「必ず優勝しないといけない重圧はある」と明かすが、実力者が集う環境は選手たちの刺激にもなっている。世界ランキング25位(3月19日時点)の戸上選手は「みんな練習熱心で、卓球への情熱も強い。一緒に行動するだけでモチベ

「シヨンが上がる」と口にする。
 主力が不在の時期が長くとも、
 倉嶋監督が言うには「負けても仕
 方がないという雰囲気は一切な
 い」。力のある選手が高め合い、
 緊張感や重圧も力に変えていく。
 東京が「常勝」足るゆえんを示し
 た。



3月24日に行われた女子決勝で
 は、日本生命が神奈川を破って王
 座を奪還した。

最初は「予想外」だった。連覇
 を狙った神奈川は第1ゲーム、日
 本生命の村上恭和総監督が「思い
 込んでいた」ペアとは違う木原美
 柚選手、長崎美悠選手組を起用。
 今年の全日本選手権を制し、世界
 選手権の出場経験もあるペアだ。
 村上総監督も「次で取ろうかな」
 考えたほどだ。

だが、決勝に向けて準備を進め
 ていた笹尾明日香選手、麻生麗名
 選手組は動じなかった。第1ゲー
 ムは失ったが、「向かっていく気
 持ちは忘れずに試合ができた」と

麻生選手。相手のミスもうまく突
 き、第2、3セットを連取して逆
 転勝ち。これで流れをがっちりつ
 かんた。

第2ゲームで孫銘陽選手がパリ
 五輪代表の張本美和選手に勝利す
 ると、第3ゲームでは早田ひな選
 手が平野美宇選手との五輪代表対
 決を制した。終わってみれば3-
 0の完勝劇だった。

ダブルスは、準決勝では中国選
 手のペアを器用していたように、
 他の選択肢もあった。笹尾選手と
 麻生選手について村上総監督は
 「一番ダブルスの練習をした。(負
 けても)来季頑張れよという気持
 ちで」と起用の意図を明かした上
 で、「一番不利だと思っていたダ
 ブルスを勝てた」とたたえた。

笹生選手は神奈川を「最強チー
 ム」と評し、早田選手も「0-3
 で負けてもおかしくなかった。実
 力は伯仲していて、(第1〜3ゲ
 ームとも)ちょっとした差で上回
 っただけ」と語る。一発勝負の醍
 醐味が詰まった決勝だった。